

品川宿の宿並模型

—江戸・品川へのプロローグ—

お店の中までのぞいてみよう

品川宿は、鎌倉時代からあったとされていますが、戦国時代には目黒川をはさんだ海岸沿いに南品川宿と北品川宿が形成されていました。江戸時代になり、東海道第一番目の宿場町として定められた後、北品川宿から高輪たかなわに向かって家並がのびて新町を形成し、享保7年（1722）、この新町が法禅寺門前町ほうぜんじと善福寺門前町ぜんぶくじとともに歩行新宿として宿に加えられました。新宿の追加によって、品川宿の宿並は、道幅3～4間（約5～7m）、南北に19町40間（約2143m）で高輪町境から大井村境の海晏寺門前まで続くことになりました。

品川歴史館に展示されている品川宿宿並模型は、弘化2年（1845）頃の「品川宿宿並図、伝馬役・歩行役図」をもとに、「東海道分間延絵図」などを参考にして、目黒川を中心とした500mを復元したものです。江戸時代後期の家並のため瓦葺きが多くなっています。品川宿の商家は裏面に掲載した表のように、宿場らしく旅籠屋しゆくかや水茶屋みずぢや、食べ物を売る店が多いのが特徴です。店の模型は、葛飾北斎や歌川広重らの描いた錦絵にしきや江戸時代に出版された本の挿絵などを参考



▲問屋場の図（『駅通志稿』より）

にして、一軒一軒商売にあわせて店の中まで作られています。ちょっと小さな模型ですが、足下に埋め込んだ宿並図を参考に、品川宿の世界をお楽しみください。

宿場の役所 — 問屋場 —

江戸時代、宿場で人馬の継立じんば つぎたてを行ったのが問屋場といやばです。問屋場では、公用の旅行者のために次の宿場まで荷物を運ぶ馬（伝馬）と人（人足）を用意しており、品川宿の場合、川崎宿と日本橋に人馬を継ぎ立てました。公用の旅で、あらかじめ決められた人馬の利用は無料でしたが、それ以上の利用は有料で、決められた賃銭おさだめちんせん（御定賃銭）で利用しました。



▲品川宿の宿並模型（本陣付近）



▲品川宿の宿並模型（問屋場・貫目改所）

また、一般庶民や商人の荷物の利用者は、この問屋場で人馬を交渉で賃金を決めて（相対賃金）調達しました。庶民の旅行では問屋場へかからず、宿場や道端にいる駕籠かきや馬子に直接交渉したり、彼らにすすめられて利用していました。

この問屋場には、役人として問屋（宿場の長）、年寄（助役）（書記）、人馬に荷物を振り分ける馬指（馬差）と人足指（人足差）がいました。品川宿の問屋場は、宿が南と北に分かれていたため、当初、南品川宿三丁目東側北角（現、南品川2丁目13番付近）と北品川宿一丁目西側（現、北品川2丁目30番付近）の2ヶ所にありました。しかし、文政6年（1823）の品川宿の大火で2ヶ所とも焼失してからは、南品川宿の1ヶ所となりました〔約26坪（85.5㎡）〕

正徳2年（1712）、品川宿の問屋場には、荷物が定められた重量以内であるかを検査する貫目改所が設置され、問屋場と同じ建物に入っていました。

品川宿の商人数〔天保14年（1843）調べ〕

商	人	軒数	商	人	軒数
食売旅籠屋		92	すし屋		9
水茶屋		64	貸ふとん屋		8
古着古道具屋		64	とうふ屋		8
荒物屋		59	小間物屋		8
煮売り屋		44	銭湯（洗湯）		8
質屋		40	薬屋（薬種）		7
酒屋（味噌・醤油）		32	かばやき屋		5
舂米屋（精米）		25	ちょうちん屋		3
平旅籠屋		19	呉服屋		2
さかな屋		17	瀬戸物屋		2
餅菓子屋		16	金物屋（鉄物）		2
炭薪（すみ・まき）		16	紺屋		2
八百屋		15	薬湯		2
ろうそく水油屋		12	乾物屋		1
たばこ屋		9	足洗場		1
そば屋		9			
合計601軒					

（南品川宿名主利田家文書「宿方明細書上帳」より）

▶「品川宿宿並図」、伝馬役・歩行役図」（模型復元部分付近） △印は伝馬役を指します。

